

# Rust 入門

# Rust とは

## 速い

- C++と同じくらい速いらしい。ガベージコレクションがない

## 安全

- 所有権の概念のおかげで（ガベージコレクションがなくても）メモリ安全、スレッド安全

## 生産性が高い（らしい）

## マルチパラダイム

- 手続き的にも関数型的にも書ける

## そしてオープンソース

# インストール

- Windows : [Windows](#) で Rust 用の開発環境を設定する
  - Windows では Microsoft C++ Build Tools が必要
  - WSLなら `curl --proto '=https' --tlsv1.2 -sSf https://sh.rustup.rs | sh`
- Mac : [macOSでRustのローカル開発環境を整えるための手順2022](#)
  - WSLと同じコマンドでよさそう
- `cargo --version` でバージョンが表示されればOK
- 適宜 VSCode の拡張機能を入れる ([rust-analyzer](#), [CodeLLDB](#))

インストールしなくても[Rust Playground](#)でコードを実行できる

# VSCodeでのデバッグ、実行

- `cargo new {project name}` でプロジェクトが作成される
- プロジェクトフォルダをVSCodeで開き、ダイアログで `OK`, `Yes` を押すと `launch.json` が作られる (参考)
- 次から `F5` でデバッグ、`Ctrl+F5` で実行できるようになる
- `rustc {filename}.rs` でビルドされる

# Rust の仕様

# Rustでは所有権を通してオブジェクトに触る

- スコープを抜ける or 所有権を渡すともとの変数が持っていた所有権は消失する。**参照**を渡すとい
- 所有権がすべて失われるとオブジェクトが破棄される

	不変	可変
原本	<code>let a = 10;</code>	<code>let mut b = 20;</code>
参照	<code>let aref = &amp;a;</code>	<code>let bref = &amp;mut b;</code>

- 関数呼び出し時に**借用チェック**がクリアされる必要がある
  - 不変参照と可変参照が同時に存在しない
  - 可変参照は1つしか存在しない

# コピートレイト

- コピートレイトの実装された型のコピーでは、所有権は移動せずオブジェクトがコピーされる
- Rustのプリミティブ型、不変参照はコピートレイトを実装している
- 可変参照はコピーされない
- オブジェクト指向言語でプリミティブ型はdeep copyされるのに似ている
- **トレイト境界**：あるトレイトを実装しているか否かで型を制限できる

```
fn copy_trait_check<T: Copy>(_: T) {}
```

に渡せる型はコピートレイトを実装している

# データ型

- 整数、`f32`, `f64`, `bool`, `char`, タプル、配列など
- 数字リテラルは `_` で区切れる
- `0x`, `0o`, `0b` が16,8,2進数リテラルの接頭辞



# もろもろ

- パターン分解できる： `let (x,y,z) = (1,2,3);`。無視するときは `_`
- 型を明示的に指定できる（普段はrust-analyzerが推定される型を表示している）
- 同じスコープ内で変数を使い回せる
- シャドーイングが有効
- キャストは `as` を使う： `let c = 13u8 as u32 + 7u32;`

# 配列・スライス

- 配列: `let a = [1,2,3,4,5];`
- スライス: `let s = &a[1..3];`
- 範囲の指定 `x..y` :  $x \leq i < y$ , `x..=y` :  $x \leq i \leq y$ , `..y` :  $i < y$  など
- 範囲指定は `for` 文でも使える

```
let mut sum = 0;
for i in 1..10 {
    sum += i;
}
```

- 文字列リテラル、文字列のスライスは `&str` 型
- `String::from("uouo")` は `String` 型

# 関数

```
fn add(a: i32, b:i32) -> i32 {  
    a + b  
}
```

- 引数は（返り値がある場合は返り値も）型を指定する必要がある
- 引数でもパターン分解を使える

```
fn add(&(x, y): &(i32, i32)) -> i32 {  
    x + y  
}  
fn main() {  
    println!("{}", add(&(1, 2)));  
}
```

# 制御構文

- `if 条件 { ... } else if 条件 { ... } else { ... }`
- `if` 文も式を返す: `let mod2 = if a % 2 == 1 {"odd"} else {"even"};`
- `loop` 文は `break` で値を返せる (条件式はない)

```
fn main() {  
    let mut a = 7; let mut ret = 1;  
    let a0 = a;  
    let result = loop {  
        ret *= a; a -= 1;  
        if a == 0 { break ret; }  
    };  
    println!("{}", a0, result);  
}
```

- `for`, `while` は値を返さない (`()` を返す)

# 構造体

```
struct Cmplx { real: f32, imag: f32 }
fn main() {
    let mut z = Cmplx { real: 0.5, imag: 0.9 };
    z.imag = -3.;
    fn build(real: f32, imag: f32) -> Cmplx { Cmplx {imag, real} }
    let w = Cmplx {imag: 4., ..build(1., 2.)};
    println!("w = {} + {} i", w.real, w.imag); // w = 1 + 4 i
    println!("z = {} + {} i", z.real, z.imag); // z = 0.5 + -3 i
}
```

- `let mut` するとフィールド全てが可変になる
- 変数名と一致しているフィールド名は省略できる
- 指定しなかったフィールドは `..` 後のオブジェクトのフィールドを束縛する

# タプル構造体

```
struct Cmplx(f32, f32);  
fn main() {  
    let z = Cmplx(1., 2.);  
    let Cmplx(x, y) = z;  
    println!("{}", z.0, z.1);  
    println!("{}", x, y);  
}
```

- `.0`などでアクセスする
- 要素の分解もできる

# メソッド、関連関数

```
struct Cmplx { real: f32, imag: f32 }
impl Cmplx {
    fn abs(&self) -> f32 { self.real * self.real + self.imag * self.imag }
    fn new(real: f32, imag: f32) -> Self { Self { real, imag } }
}
fn main() {
    let z = Cmplx::new(3., 5.);
    println!("{}", z.abs());
}
```

- 書き換えるときは `&self` の代わりに `&mut self`
- `self` だと呼び出し元のオブジェクトの所有権がメソッドに渡り、元の場所でそのオブジェクトを使えなくなる
- `Self` は型エイリアス

# 列挙型

```
enum OpticalDisc { CD(u32), BD(String, u32) }  
fn main() {  
    let bd = OpticalDisc::BD(String::from("ROM"), 120);  
}
```

- 列挙子に値を持たせられる。持たせる値の型は列挙子ごとに違っていい
- メソッドも定義できるシトレイトも実装できる
- 列挙子に持たせたオブジェクトは `match` 文で取り出せる

## デフォルトで用意される列挙型の例

```
enum Option<T> = { Some(T), None }  
enum Result<T, E> = { Ok(T), Err(E) }
```



# ジェネリクス

```
use std::f32::consts::PI;
enum OpticalDisc<T> { CD(T), BD(String, T) }
impl<T> OpticalDisc<T> {
    fn newBD(r:T) -> OpticalDisc<T> {
        OpticalDisc::BD(String::from(""), r)
    }
}
impl OpticalDisc<f32> {
    fn area(&self) -> f32 {
        match *self {
            OpticalDisc::CD(r) => r.powi(2) * PI / 4.,
            OpticalDisc::BD(_, r) => r.powi(2) * PI / 4.
        }
    }
}
fn main() {
    let bd = OpticalDisc::<f32>::newBD(120.);
    println!("area of bd is {}", bd.area());
}
```

- ジェネリック型：任意の型を受け取れるようにしてコードの重複を回避する仕組み
- ジェネリック型のメソッドを定義できる。特定の型のときのメソッドを定義することもできる
- コンパイル時は型が分かるので型に特化したコードが生成される（単相化）
- **turbofish演算子** `::<...>` で型を明示的に指定できる

# パターンマッチ

```
fn main() {  
    let a: Option<String> = Some(String::from("gueue"));  
    match a {  
        Some(ref x) => println!("{}", x),  
        _ => {println!("uouo"); ()}  
    }  
    println!("{:?}", a);  
}
```

- パターンマッチはマッチした腕だけが評価される（短絡評価）
- 残りのパターンは `_` で一括して受け取れる
- パターンマッチで所有権が移るので、参照でマッチさせるのがよい。
- `_` 以外が1つなら `if let Some (ref x) = a {println!("{}", x)}` のように短く書ける
- マッチガード： `識別子 条件 =>` のように条件を追加できる

# 自然数？

```
enum Nat { S(Box<Nat>), 0 }  
fn main() {  
    let one = Nat::S(Box::new(Nat::0));  
}
```

# エラー処理、コンビネータ

- `panic!("メッセージ")` でメッセージとともに強制終了できる
- `option.unwrap()` は内部で `match option { Some(v) => v, None=>panic!(...) }` のような処理をしてくれる
  - `Result` 型についても使える
  - `except` ならメッセージも追加できる
- `? 演算子` を `Option`, `Result` 型に作用させて、値がないときに呼び出し元に返す処理を実現できる。
- `let ret = open()?.read()?.replace()?.write()?.close()?;` みたく書ける (コンビネータ)
- `map`, `and_then` などを活用して簡潔に書ける

# トレイト (インターフェースみたいなもの)

```
struct Cmplx { real: f32, imag: f32 }
pub trait Distance {
    fn abs(&self) -> f32;
    fn name(&self) -> &str { return "Distance" }
}
impl Distance for Cmplx {
    fn abs(&self) -> f32 {
        self.real.powi(2) + self.imag.powi(2)
    }
    fn name(&self) -> &str { return "Complex" }
}
fn main() {
    let z = Cmplx { real: 1., imag: 2. };
    println!("{}", z.name(), z.abs());
}
```

- 構造体にトレイトの実装を付与できる（構造体をトレイトのインスタンスにする）
- デフォルトメソッドをオーバーライドできる
- トレイトはトレイトを継承できる： `pub trait Comparable : Distance{ ... }`
- トレイト境界を指定できる： `fn comp<T: Distance>(d1: &T, d2: &T) { ... }`
  - `fn name:(d1: &impl Distance),`
  - `fn comp(d1: &T, d2: &T) where T: Distance` のようにも書ける
  - `+` で複数のトレイトを指定できる
  - ジェネリック型にもトレイト境界を設定できる

# derive属性、Fromトレイト

```
#[derive(Debug)]
struct Cmplx { real: f32, imag: f32 }
impl From<f32> for Cmplx {
    fn from(real: f32) -> Self {
        Cmplx { real, imag: 0. }
    }
}
fn main() {
    let z = Cmplx::from(1.);
    let w: Cmplx = (2.).into();
    println!("{:?} {:?}", z, w);
}
```

- 実装したいトレイトを型の定義時に指定できる
  - よく使われるトレイト: `Copy`, `Clone`, `Debug`, `(Partial)Eq`, `(Partial)Ord`
- `From`トレイトを実装すると `into` メソッドが使える



# メモリについて

- リソースの確保、解放とオブジェクトの生成、破棄が同時
- `*`（参照外し：参照先のオブジェクトを操作する）は `Deref` トレイト（可変なら `DerefMut`）を実装すると実現できる
- `Drop` トレイトを実装して参照破棄時の挙動を設定できる
- メモリ領域は3種類ある
  - **データメモリ**：静的データを格納する
  - **スタックメモリ**：関数呼び出し時の引数などの一時的なデータを格納する
  - **ヒープメモリ**：`Box::new(...)` に渡されたオブジェクトが格納される
- **参照カウンタ**：原本の所有権が破棄されても仮の所有権を保持できる。`Rc::clone` に参照を渡せばよい。

# 内部可変性 (`use std::cell::Cell;`)

- コピートレイトを実装した型を内部可変にするとき
  - `let a = Cell::new(10);` で作成、`a.get()` で取り出し、`a.set(20)` で代入
  - `a.replace(20)` はpopしてpush、`a.into_inner` で内部オブジェクトを取り出す
  - 不変・可変の検査が（コンパイル時ではなく）実行時に行われる（？）
- else
  - `RefCell` を使う
  - `.borrow()` で不変参照、`.borrow_mut()` で可変参照が返される
  - 可変・不変参照が満たすべき条件は（実行時に）満たしている必要がある

# クロージャ（無名関数）

```
fn returns_closure() -> impl Fn(i32) -> i32 {  
    |x| x + 1  
}  
fn main() {  
    println!("{}", returns_closure()(2));  
}
```

- クロージャは動的サイズ型なので `impl` を外すとまずい
- `impl` の代わりに `Box< ... >` を使ってもよい

# 並列処理

# マクロ

- 接尾辞 **!** がつく

イテレータ

## さらに詳しく

- [Tour of Rust](#) : コードを実行しながら学べる。英語に抵抗がなければおすすめ。

# 参考文献

- [Rust入門](#)
- [Rust入門 \(PDF\)](#)